The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フーコー<権力論>再考
Author(s)	相沢, 哲
Citation	年報人間科学. 1994, 15, p. 35-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11505
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フーコー〈権力論〉再考

相沢　哲

〈要旨〉

本稿では、ミシェル・フーコーの残した、〈権力〉の概念化に関わる諸々の理論的提言と、具体的な〈権力〉の記述―分析の成果とを、その〈メタ理論的前提〉との関連に着目して検討する。この作業により、フーコー〈権力論〉が旧来の権力理論とどのように異なっているかを明確にすると同時に、頻繁に見受けられるタイプの、フーコーに対する誤解を解く。

特に本稿が批判の対象とするのは、主体＝主観を、権力や社会的なものの起源・基礎として議論の起点に置くような、形而上学的な思考の枠組と、そこから生じたものと思われる類型のフーコーへの誤解である。

本稿で、特に強調される主題的論点は以下の通り。即ち、フーコーにとって〈主体〉は、議論の始めに置かれるべきものではなく、それが歴史的に条件づけられた特定の〈経験〉からどのように構成されるかが問題にされねばならぬものだったのである。個々の主体に先だって、身体や建築物などのマチエールの配置や、歴史の中でその形態を変える、種々の実践の連関が存在するのであり、人間個体は、そうした諸関係の中で事後的に種別的な〈主体〉として構成されるのである。フーコーの〈権力の分析学〉は、そうした実践の連関の一つの相／次元であるところの、人間個体を取り囲み、貫通する諸力（諸作用）の関係を記述―分析するためのものであった。つまり、特定の人間の存在形態の条件の方が、〈権力〉関係の分析を通して解明されねばならなかったのだ。

キーワード

メタ理論的前提、実践の連関、諸力の関係

I　はじめに

ミシェル・フーコーが残した、〈権力〉に関する独創的・問題提起的な諸論考が、社会学界に導入されてから久しい。彼の思想・〈権力論〉への良質な入門書は日本でも既に何冊か刊行されており[1]、例えば彼が、「ミクロ権力」への注目を促したこと、権力を否定的・抑圧的なものでなく肯定的・産出的なものとして捉えるよう提言したこと、その内部において非人称の視線を内面化した「主体＝従属体」を生み出すパノプティコン（一望監視施設）のメカニズムを（再）発見したこと……、等々は今や斯界の常識となっていると言ってよかろう。

しかし、その一方で、筆者の見るところ、誤読・無理解に基づく〈フーコー権力論〉への批判や、あるいは「誤った期待」もまた跡を断たない（もっとも、その誤解の原因がフーコー自身の「ものの言い方」の側にあることもしばしばなのではあるが、ともあれ）。

本論考ではまず、いわゆる「フーコー権力論」――〈権力〉の概念化に関わる種々の提言、及びその〈権力分析〉の具体的な手続き／仕組み――を、その〈メタ理論的前提〉とも言うべき、彼の特異な問題設定と思考の枠組（独特のものの見方・考え方）に関連させて整理・検討する[2]。その作業を通して、彼の〈権力論〉の uniqueness の由来するところを示すとともに、社会学界においてしばしば見受けられる、あるタイプの「誤解」を解きたいと思う。その上で、彼が立てた問題そのものとその問題の背景にある〈哲学〉について簡略に論じ、彼の〈権力論〉の今日的な意義について考えてみたい。

〈メタ理論的前提〉という語を用いることによって、どのようなことを問題にしたいのか？――そもそも〈権力〉という概念は、それ自体を〈客観的〉な事象と対応させることができるものではなく、むしろその前提となるそれぞれの理論体系と、その中に占める位置とに応じて異なった意味内容を持たされるものであるように思われる（「語の意味とは、言語ゲームの中におけるその用法である」のならば、当然のことではあろうが……）。具体例としては、社会をシステムとして捉え、権力をシンボルによって一般化された交換／コミュニケーションのメディアと考え、権力の、それなくしてはありえなかったはずの事態を可能にするものとしての側面を強調する立場／視座と、社会を階級闘争の場と捉え、権力を主にある集団から他の集団への支配の作用と考え、権力の、自由の可能性の制約としての側面を強調する立場／視座との対立などを想起されたい。この対立において実際に問題となっているのは、どちらが「客観的で正確な権力理論」に漸近し得るか、といったことではなく、基本的な立場としてどのような社会哲学や認識論を採用しているか、〈権力〉という概念をどのような問題の解明のために用いているのか、等々についての根本的な相違であろう。

少々乱暴に話を一般化すると、いかなる社会理論（／社会的事象の分析）も、何を熟考されるべき問題とみなし、何を所与とみなす

か、何を本質的な事象／要素とみなし、一方で何を捨象するか……等々についての前もっての判断、つまり何らかの〈メタ理論的前提〉（言わば、思考の枠組としての〈哲学〉に則って構築・展開されるのであり、各々の理論の具体的な内容は、――ときに論者自身によっては明確な形で提示されぬこともある――そうした〈メタ理論的前提〉に大きく規定されるものと考えられる。そうであるならば、それぞれの理論の理解や比較検討のための作業も、まず〈メタ理論的前提〉の水準から始められるべきではないか。

とりわけフーコーの〈権力論〉の場合は、その功績である前人には為しえなかったような諸発見も、他方、しばしば誤読される原因となるその理論的な「仕組み」の「わかりにくさ」も、ともに彼の根本的な発想の転換によりもたらされたものと思われる。そのことを以下の議論で論証してみたい。

ところで、著された時期によって、また論ずる対象とともに、刻々とその表面的な姿（用いられる語彙など）を変えていくフーコーの〈哲学〉の諸側面――例えば独特の〈歴史認識論〉や〈言語観〉――の全てを、限られた紙幅の中で詳論することは遺憾ながら不可能であり、以下、問題を次のように絞って、議論を進めていく。――『監獄の誕生』『性の歴史Ⅰ・知への意志』の二著作で展開される具体的な議論において、フーコーは何を解明すべきものとして取り上げ、他方で何を記述―分析の出発点に置いていたか。そこで用いられているような術語、〈モデル〉が選ばれたのはなぜか。つまるところ彼は、〈権力〉の概念を用いて、どのような問題を考えようとしていたのか。そうした問題設定の背景には、どのような〈哲学〉があったのか。

Ⅱ　唯名論の立場――〈権力〉は実体ではない

まず、フーコー自身の言葉をいくつか引いておこう。

「おそらく唯名論の立場をとらねばならない（il faut sans doute être nominaliste）。権力とは一つの制度でもなく、一つの構造でもない、ある種の人々が持っているある種の力でもない。それは特定の社会において、錯綜した戦略的状況に与えられる名称なのである」[3]

「権力なるもの（'le' pouvoir）は存在しません。……ある一定の場所に／ある一定の点から来た、権力たる何ものかがあるという考えは、私には細工を施された、いずれにせよ相当の数の現象を考慮に入れていない分析に基づいていると思われるのです。権力とは、実際には……諸々の関係の束なのです。従って問題は、一方ではブーランヴィリエが、他方ではルソーがやろうとしたことのやり直しとなってしまうような、権力の理論（théorie）を作り上げることではありません。彼等は、双方とも、あらゆる人間が平等であるという原初的状態から出発します。それから何が起こるでしょう？　それは、一方においては歴史の侵入であり、他方においては神話的―法的出来事なのだけれども、いずれにせよ、ある瞬間から人々は諸々の権利を失ってしまって、権力が出現したことになっています。

もし権力の理論を構築しようとするのならば、権力を一定の点、一定の瞬間に出現したものと相変わらずみなさなければならなくなり、その出現について推測し、権力の起源を再構成しなければならなくなるでしょう。しかし、もし権力が本当は開かれた、多かれ少なかれ連携を持った（むしろあまりよい連携を持たない）関係の束だとしたら、それならば唯一の問題は、権力関係の分析学（analitique）を可能にする分析の格子を手に入れることなんです。[4]」

「〈権力〉という」この総括的で抽象を実体化してしまう術語（this all-embracing and reifying term）を用いるとき、どんな内容を思い浮かべているのかが、最小限問われなければならない。つまりひとが二つの問い――権力とは何か、権力は何に由来するのか――を果てしなく問い続けるとき、現実の極端に錯綜した布置連関を見逃してしまってよいのかどうかと疑う必要があるのだ。[5]」

以上の引用におけるポイントは、〈権力〉を唯名論的に取り扱う、とフーコーが言明していることである。つまり〈権力〉は、実体ではなく、ある「状況」・「関係の束」・「錯綜した布置連関」に与えられる、言わば「ラベル」でしかない。彼が〈権力〉という語を用いるとき、それは一種の省略語法なのだ。[6]従って、権力が個人の属性や、制度・構造もしくはその拘束作用として定義されることはない。〈権力〉と呼ばれる状況・現象の全てに共通する本質的メカニズムを抽出しようとするのでもない。また、権力なしのまっさらな状態（ところでこれは、およそ非経験論的で形而上学的――ほとんど神話的な抽象ではなかろうか？）から、どのように権力が発生するかを説明する理論をつくることも、彼の仕事ではなかった。要するに、〈権力〉の「本質」と「起源」を追い求めることが問題なのではない。彼が実際に企図したのは、歴史的に（また恐らく地理的にも）範囲の画定される特定領域の「戦略的状況」の、種別的（つまり、その状況の特殊性・他のものとの差異を重視する）かつ関係論的な分析なのである。その具体的な内実について詳述する前に、この「唯名論[7]」という彼の独特な「思考法」について解説しておきたい。

彼が唯名論的に取り扱った概念／主題は〈権力〉ばかりではない。例えば、彼は最晩年の著書における、自身の思索の歩みについての総括の中で次のように述べている。

「認識の進歩としてしばしば指示されていた事柄を分析するためには、理論上の視点の移動（un déplacement théorique）が必要だと私には思われた。その移動によって私は、知を構成（articuler）していた諸々の言説的実践の諸形式を問う結果となった。また、〈権力〉の現れとして（comme les manifestations du〈pouvoir〉）しばしば記述されていた事柄を分析するためにも、理論的な視点の移動が必要であった。それにより、私は、むしろ、権力の行使／作用を構成しているところの、複雑で多様な諸関係とか開かれた戦略とか合理的な技術とかを問う結果となったのであった。〈主体〉として指示される事柄を分析するためには、今度は、第三の立場の移動を企てなければならないように思われた。その場合、個人が主体として自分を構成し認識する手だてとしての、自己との関係の形式や様

態はどのようなものであるかを研究するのが適切であった。[8]」

さきに筆者が「根本的な発想の転換」と表現した事柄が、ここで「理論的な視点の移動（＝ずらし）」として語られている。この「移動」こそ、彼の諸著作の独創性の核心である。

一九六〇年代に書かれた『狂気の歴史』『臨床医学の誕生』『言葉と物』といった著作においては、「認識の進歩としてしばしば指示されていた事柄」――例えば、一八世紀の「疾病分類学」的医学から一九世紀の解剖学的－臨床医学への「進歩」、古典主義時代の「富の研究」から近代の経済学への「進歩」等々――が、「考古学的分析」の対象となっていた。つまり、フーコーは「認識の進歩」という旧来の「ラベル」を粗大で不適切なものと考え、そう呼ばれていたものを、ある特定の言葉のみを存在せしめる言説的実践の種々の規則の変換として記述－分析したのである。

さらに〈権力〉、〈主体〉の二つの語は、括弧と迂言法（「～として記述されていた……」）により、「二重の距離をもって提示されている[9]」。要するにこの二つの概念も、その内実を再検討しなければならない大雑把な「ラベル」なのだ（このうちの〈主体〉の方に関しては、第Ⅳ章で取り上げる）。

一九七〇年代の主要著作、『監獄の誕生』『性の歴史Ⅰ・知への意志』においては、例えば、前者では犯罪者を処罰する権力が、後者では性を抑圧する権力が、それぞれ顕になる場面として、これまで考えられてきたような社会的状況が取り扱われている。しかし、そこで記述－分析の対象となっているのは、実体としての権力ではなく、局地的な「複雑で多様な諸関係」なのであり、実際に見出されるのは、「開かれた戦略」や「合理的な技術」なのである。この「戦略」や「技術」といった用語と、それによって指し示されることどもについては、次の章で取り上げて解説する。

ところで、そこへ進む前にもう一つ確認しておくべきことがある。「権力がある」と考えられるような状況における、「複雑で多様な諸関係」の記述－分析こそが為されるべき作業であったわけだが、例えば何と何の「関係」なのか？　言い方を変えると、〈権力〉は唯名論化＝脱実在論化されるわけだが、その一方で何が確実に存在するものとみなされ、記述の与件・出発点となるのだろうか。

P・ヴェーヌも指摘しているように[10]、フーコーがその記述の与件としていたものは、「言説的実践」も含めた種々の実践（pratique）と、実践の連関によって初めて明確な役割・顔立ちを与えられるような、質料（matière）としての事物――物理的諸事象、モノとしての言語、身体、など――である。

フーコーの「実践」概念の用い方について一言。「実践」といっても、理論と対置されるそれではない。例えば、ある理論的著作を書き綴ること、これも、特定の形態の言語を生産する「言説的実践」（の一種）なのである。犯罪者に身体刑を加えること、監獄を造ってそこに違法者を監禁すること、観察すること、記録すること……等々、要するに人間が実際に行う全ての事柄を、意識・主観に不関与な次元で取り上げるとき、それらは「実践」として記述されるのだ。その際に着目されるのは、歴史上のある時点から採用され、い

ずれは消えてゆくかもしれぬ「ものごとのやり方」としての側面であり、「実践」の連関を行為主体の意図により始められるものとされる「行為」の連関と同一視してはならない。

モノとしての言語、というこの（『知の考古学』において最も丁寧に定式化・敷衍されている）特異な発想に関しても、本稿の主題に関連する側面については、一言解説しておいた方がよかろう。フーコーはその分析において、言語を物理的な支えをもって（発音する、文字として書き記す……）存在せしめられたもの、出現の場所と日付を持つものとして取り扱う。特定の歴史的・社会的諸条件のもとでのみその存在を与えられ、他の種々の出来事と相関する、出来事としての言語を、フーコーは「言表（énoncé）」と名付ける。「医学」「博物学」といった、時間を貫いて存在する特定の「ジャンル」として与えられている統一体――言説（discours）は、言表が、歴史的に決定された諸規則の総体に従って配分されることにより形成＝編制されたものとして捉え直される。

モノ・存在である言語は、もはやメタ・レベルにあって他の事物や「真理」を写し出す表象とはみなされえない。言説は、特定の規則に従った実践の結果としてのみ、存在しうるモノであり、人体や建築物などの他のモノと、同じ地平の上で相互に関連することにより、真偽の分割等々の効果を、その内部に生み出すことが可能になるのである。

フーコーはモノとしての言語や、主体「以前」の身体としての人間存在に着目する、特異なマテリアリストである。〈権力〉が存在／作用している、と考えられる状況も、まず諸マチエールの配置（とその中での諸実践）の織り成す連関として描き出される。そうした記述の一例として、次に引くようなパノプティコンに関する一節が想起されよう。

「その権力の本源は、或る人格の中には存せず、身体・表面・光・視線などの慎重な配置の中に、そして個々人が掌握される関係をその内的機構が生み出すそうした仕掛けの中に存している。[11]」

フーコーが実際に記述－分析の対象とするのは、こうした連関――局地的で種別的な、複雑な関係の網の目――である。

〈権力〉（及び〈真理〉〈主体〉）の唯名論化は、この独自のマテリアリズムと表裏をなしていることに留意すべきである。フーコーの議論を、一種の「リアリティ構成論」として捉えることも可能ではあるが、「意味的構築物としての社会」について語る現象学的（現象学的社会学的というべきか）ノミナリズムと混同してはならない。

なお、この唯名論化は、J・ライクマンも論じたように、抽象的諸観念を常に歴史的文脈の中に置き直して再検討することでもある。[12] その歴史性が忘れられているものの歴史を書くこと。普遍・不変を装ういかなる事象をも、歴史の中での出来事として捉え直し、専ら他の諸々の出来事との関連においてそれを理解すべく努めること。要するに、「系譜学」的に思考すること。既によく知られていることとは思うが、これがフーコーの主要著作全てにおいて貫かれている一大原則である。〈権力〉の記述－分析も、あくまで系譜学的探求の中に埋め込まれている作業であり、従って上述のような諸

々の実践やマチエールが形成する連関は、常に歴史の過程の叙述の中で抽出・分析される。

本章の最重要論点をまとめておく。①フーコーにとって、〈権力〉という語はある種の状況に与えられる大まかな弁別的ラベルの役割を果たすにすぎない。②彼の言う「権力の分析（学）」とは、特定の時代・地域の特定の領域における、〈権力〉というラベルの与えられる状況に存在する局地的・種別的諸関係の分析であり、権力一般の「発生論」等々とは無縁の作業である。

Ⅲ　〈権力〉の記述－分析――何が明らかになるのか

本章は二節からなる。第一節では、フーコーが〈権力〉を記述－分析するために導入したモデル、術語などについて解説し、第二節では、主要著作における〈権力〉の具体的な記述－分析の成果として、それらの術語の使用によって何が明らかにされたのかを確認する。本章の作業を通して、彼の〈権力の分析学〉が、どのような問題を探求するために練り上げられたものかが明確に理解されるであろう。

（1）〈権力〉を把握するためのモデル

さて、大雑把なものとはいえ、〈権力〉という語はラベルの機能を果たす。前節で見たように、それは「錯綜した戦略的状況に与えられる名称なのである」。「戦略的状況」――つまり、〈権力〉が見出される、ということは、そこに存在する諸関係からある種の闘争が読み取れる、ということなのだ。

フーコーが〈権力〉を思考するためのモデル／イメージとして「闘争／ゲーム」を導入した、ということ自体はその著作を一読すれば了解されることであろう。だが、留意すべきは、その「闘争／ゲーム」がどのような性格のものか、ということだ。「闘争」モデルと言っても、いわゆる旧来の「コンフリクト理論」等におけるそれとは、全く異なったものなのだ（その違いは、つまるところ〈メタ理論的前提〉の違い、抱えた問題の違い、論じた対象の違いから来ているのだが）。

まず『監獄の誕生』の第一章において、〈権力〉のモデルとして「永続的な戦闘（la bataille perpétuelle）」を採用する旨が言明される。[13] この論点は『性の歴史Ⅰ・知への意志』第四章において、より詳細に展開される。即ち、旧来の権力概念の内実を規定していた、王政のイメージ、「法である権力」「主権である権力」というイメージが、西欧社会の特殊な歴史的形態の自己表象に囚われたものである旨が論じられ、代替案として次のような提言が為される。

「権力という語によってまず理解すべきだと思われるのは、多数多様な力関係（la multiplicité des rapports de force）であり、それらが作用する領域に内在的で、かつそれらの編成の構成要因であるようなものだ。絶えざる闘争と衝突によって、それらが変形され、強化され、逆転されるゲーム（le jeu）である。[14]」

『性の歴史Ⅰ』本文では、この後にも本来なら丁寧に検討すべき

様々な提言が続くのだが、ここでは特に次の点を確認しておきたい。ここで語られているのは、A・ホネットが誤読から憶測したような「諸主体が、競合する目標設定を携えて出会い、自らの目標設定を貫徹すべく争う行為状況」[15]ではないのだ。さきに確認したような、実践の連関（もしくは人員や施設などの諸マチエールの配置）が作り出す関係の網の目に内在している「力の諸関係」、それが「不断の闘争／終わりのないゲーム」として把握されているのだ。これは個人や集団の利害関心から始まる闘争ではない。「人間が全ての抑圧から解放されたユートピア」等々の必然の王国に向かって進む闘争でもない。後で確認するように、これは人間の身体・生命を取り囲み・貫く諸力の闘争であり、その絶対的な始源や終焉といったものが、実際の歴史の中に見出されることはない。ただ、歴史の中でそれがとる具体的な形態の様々な変異が観察されるだけであり、その変異は偶然・事件に左右されるものなのだ。

フーコーが、歴史的条件の外に置かれた抽象的な「行為主体」の関心や意図から何かが始まると考えること、そうした論法を、彼自身の、全てを歴史に内在させて分析する作業に持ち込むことは、決してありえない。先験的な主体に、既に存在しているものの起源の役割を押し付けるような思考の枠組を、彼が『言葉と物』において根底的に批判し去っていることを忘れてはならない。[16]

このゲームは、第一義的には、主体の存立に先立つ（ただしあくまで関係の中での）諸力の闘いと考えるべきである。例えば、フーコーがラカン派の論客達との討論において、「誰が誰に対して闘っているのか？　我々は、全てが全てに対して闘っている。そして我々のうちで、常に何かが我々の内の別の何かと闘ってるのです」と語っていること、「闘い」の「最初で最後の要素」として、個人のみならず、「部分個人（sous-individus）」を挙げていることに留意せねばならない。[17]関係の中における人間個体そのものも、諸力のベクトルの闘争の場なのである。

「主体以前の諸力」？「部分個人」？　いずれも「先験的な主体」以上に奇妙で受け入れ難い概念ではないか！――そんな反問も聞こえてきそうだが、これらの概念（とその背景にある、特異な人間観）に関しては、第Ⅳ章でまた触れたいと思う。

ともかく、局地的・種別的な関係が、ある形態の闘争／ゲームとして把握される。このモデルから由来する、「戦略（stratégie）」、「戦術（tactique）」、「ゲームの賭け金（enjeu）」といった術語が、この闘争の分析に用いられる。歴史上の特定の時期に、この闘争／ゲームに与えられた形態や、それの形成に寄与した諸政策案などから、目的論的な論理として言語化可能な「非主観的意図」[18]が読み取られうる。この論理が「戦略」であり、さらにゲームの中で用いられる様々な手段（言説なども含む）が、各「戦略」との関連で「戦術」的要素として分析されることになる。つまり〈権力〉における論理性・方向性――そうした状況はなぜ存続してきたのか、その連関は結果として何を目指したものであったか――がこれらの用語、特に「戦略」という概念によって析出される。

なお、諸力の不断の闘争であるところの〈権力〉の関係における、

「もう一方の項」[19]が「抵抗」である。〈権力〉の「戦略」は、それが目指す方向に逆らう諸力、即ち「抵抗」の存在によって、それが社会的・歴史的に生み出された一種の不自然であり、我々にとって強いられたものであることが可視的になるのだ。逆に言えば、この「戦略」は、通常、「真理」・「常識」・「慣行」……として自明視されているような諸々の言説や実践に内在しているものなのだが、「抵抗」の観点から分析され剔抉されるがゆえに、それは「権力の戦略」と呼ばれるのである。

さて、フーコーが〈権力〉を認識・把握するためにそれとなく導入した、もう一つのモデル／イメージがあると思われる。

「権力の諸関係は、（中略）それが作動する場所で、直接的に生産的役割を持っている」[20]。諸力の闘争の場である〈権力〉の諸関係は、同時にその中で様々なものが産み出される「生産網」[21]でもあるのだ。このように言うとき、フーコーの脳中にあった具体的なモデルは、どのようなものであったのだろうか？――〈Non au sexe roi〉（邦訳の題は「セックスと権力」）と題されたインタヴュー記録の中で彼は、『性の歴史Ⅰ』で描き出されている、多種多様な性に関する言説及び性的諸事象（sexualité）を産出する、積極的な（抑圧・禁止は、言わばその「部品」であるような）メカニズムとしての権力関係の網の目について、マルクスが分析した「資本主義的生産」との類比で語っている[22]。即ち、「資本主義的生産は、その基本的法則によって必然的に貧困を生み出さざるをえない」ことをマルクスは明らかにしたのだが、「このマルクスのやり方に少し手を加えると、ほぼ自分のしたかったことになる」と。「何らかの様式に基づいてセクシュアリテを生産し、不幸な結果をもたらす積極的なメカニズム」は、資本主義的生産（これは〈階級闘争〉の場でもあった……）と類比的に捉えられるようなものなのだ。永続的闘争／ゲームのモデルもそうだが、フーコーが〈権力〉関係を、極めてダイナミックな運動が内在するものと想定し、構造や状態というよりは過程として把握していることが察せられよう。

局地的な〈権力〉の諸関係の、こうした積極的・産出的なメカニズムとしての側面を抽出するための術語が「装置（dispositif）」である。この「装置」の内部において観察される、人間個体や集団の統御の効力を持つ種々の実践が「技術（technique）」、そうした実践と言説の総体が「テクノロジー」と呼ばれることになる。「戦略」は「なぜ／何のために？」を分析するための用語であったが、これらの用語、特に「技術」は「どのように？」という問いに答えるためのものと考えられる。〈権力〉の諸関係の内部における、人間の振舞の統御の作用（『監獄の誕生』において「ミクロ権力」とよばれていたもの）[23]がどのようにもたらされるのかは、「技術」の具体的な描写によって明らかになるのである。

以上、〈権力〉関係を把握するために採用された二つのモデル――「不断の闘争／ゲーム」と「生産的なメカニズム」――と、そのモデルに由来すると考えられる術語群について瞥見してきた。

（2）〈主体〉構成の条件としての〈権力〉

以下では、〈権力〉が主題的に扱われた、一九七〇年代の二冊の労作（『監獄の誕生』『性の歴史Ⅰ・知への意志』）の中で、具体的にどのような「技術」が描写され、どのような「戦略」が析出されていたかを、まず確認する。

『監獄の誕生』の論述は、近世・近代フランスにおける、刑罰に関わる諸々の実践と言説の歴史的変遷を追う形で進められる。はじめに、その流れを押さえておきたい。

旧体制下においては、軽犯罪にはしばしば黙認の余地が与えられる一方、重罪を犯した者は、君主権の行使・報復の儀式である、凄惨な身体刑に処せられていた。一八世紀に入ると、そうした事態への批判が高まり、法律家・哲学者等によって刑罰／刑法の改革案が提出される。ところが、その後実際に刑罰の一般的形態となったのは、彼等の計画案の中には存在していなかった投獄・監禁であった。この予想外の「刑罰の監獄化」は、社会の様々な領域への、「規律・訓練（disciplines）」と呼ばれる種々の技術の普及・一般化の一環として理解可能である旨をフーコーは論じる。さて、その後、現実には監獄の導入によって犯罪発生率が減少することはなく、逆にそれは、非行者・再犯を生み出してしまうことが明らかになる。にも関わらず、監獄は今日に至るも廃止されてはいない。フーコーは、監獄がむしろ「非行者（délinquant）」を生産・供給する機能を果たすことによって、「非行者を通しての違法行為の管理」という戦略に組み込まれているが故に存続していることを喝破する。

『監獄の誕生』を、人間が権力によって包囲され、不自由が増大していく歴史を描いた書物と信じ込んでいる人が少なくない。しかし、そこに実際に描かれているのは、違法行為をめぐる戦いの歴史において、あてが外れ、挫折し、妥協を余儀なくされるようなものとしての〈権力〉の戦略の変遷なのだ（至るところに〈権力〉はある。しかしそれは結果が保証されているわけではない「開かれた戦略」なのだ）。即ち、――ほとんど実現されなかった、法的主体の観念に照準する（犯罪は損だ、ということを人々に納得させようとする）一八世紀の改革案の戦略。収監される者の矯正に失敗する監獄。違法行為を根絶するよりは、一定の範囲内で管理しようとする方策……。

また、そこで析出される戦略は、どれもある種の主体の操作／形成を目指したものであったことを記憶に留めておきたい。即ち、――改革案で計画されていた処罰における「自らについての表象が操作される精神」[24]＝再規定途上の法的主体。規律・訓練（＝矯正・治療・再教育……）により、ノルム（規格＝正常態）化された主体。その生活史や内面に犯罪行為の原因たる何ものかを持つ者として取り扱われ、また実際に、しばしば再犯を繰り返してしまう「非行者」……。

各々の〈権力〉関係の中では、このような、特定の属性を持った主体が生産される（もしくは、その生産が企図されている）のである。マチエールである身体を、こうした諸主体へと変形せしめるのが、「技術」やその連関である「装置」なのだ。一八世紀の改革案からは、人間の観念に働きかける「セミオテクノロジー」が析出さ

れるが、これは結局仮想的なものにとどまった[25]。重要なのは、「規律・訓練」と総括的に呼ばれる、身体の統御・強化をもたらし、また個人を被観察状態に置くことにより、個人についての知を生み出すことにも貢献する、多種多様な技術である。例えば、独房・席順等々の空間への個人の配分に関わる諸技術、時間割り・計画表等々の活動のコントロールに関わる諸技術、監視、賞罰、試験＝検査……。これらの一群の技術は、組み合わされてメカニズム（＝「装置」）を形成し、一八世紀以降、学校・工場・病院・兵営等々において採用されていく。一望監視方式はいくつかの技術が組み合わされ、しかも「自動化」されたメカニズムなのだ。もっとも、これらの技術も、監獄においては種々の理由から、大きな成果を上げることができないのであるが……[26]。

続いて世に出された『性の歴史Ⅰ・知への意志』において提示されているのは、正確に言えば分析的作業の成果ではなく、一つの研究要綱（分析枠組の素描と、後に続く巻でさらに詳細に検討されるはずであった歴史解読の仮説）にすぎない。しかしこのことは、フーコーの思考の筋道自体を取り出すには、むしろ好都合と言える。

よく知られているように、彼は、近代西欧において性は長らく抑圧されてきた、という旧来の定説を批判し、過去三世紀に見出されるのは、むしろ性に対する公的な関心と性に関する言説（性を忌避する内容のものも含めて）の増大である、と主張する。近代西欧において性に課されてきた〈権力〉は、禁止の命令や抑圧としてではなく、性を危険・秘密に仕立て上げることによって、その言説化と統御を目指してきたメカニズムとして把握されねばならぬ、と。第一義的に重要なのは「積極的な」戦略であり、「否定的要素」はそうした戦略に沿って形成されたメカニズムの内部の「局地的で戦術的な役割を持った部品にすぎないのだ[27]」。

「一八世紀以降、性についての知と権力の種別的な諸装置を発展させた四つの大きな戦略的集合[28]」として次のようなものが挙げられる。(1)女の身体のヒステリー化。(2)子供の性の教育化。(3)生殖行為の社会化。(4)倒錯的快楽の精神医学化。これらの戦略の各々に従って種別的な〈権力〉関係が形成され、その中で、女性の身体、子供の行動や心理、夫婦間の生殖行為、「倒錯した大人」が、それぞれ性的なもの（sexualité）として構成され、観察・管理・介入の対象となるのである。フーコーは、これらの戦略がどのような論理に従っているかを、さらに抽象度を上げて考察し、近代西欧文明は個々人の身体の強化と人口の増大／調整を目指していたのであり、それゆえ生が、また性が積極的な介入の対象となったのだ、という大胆な仮説を提示している。

そうした〈権力〉のメカニズムの中で用いられる技術として、『性の歴史Ⅰ』で主題的に論じられているのは「告白」である。告白は真理を生み出す技術として、西欧社会において「最も高く評価され[29]」てきたものであり、フーコーによれば「我々の社会は異常なほど告白を好む社会となった[30]」。この技術は教会における告解に始まり、訊問・診察・自伝的記録・手紙……、と多様な形態をとって様々な領域で採用されていった。告白の実践によって、人はその内側

に告白すべき何ものかを持った主体として存在せしめられるのだ。

以上、彼が独自の述語を駆使して行った分析の成果を駆け足で見てきたが、これにより次のことが明確になったことと思う。即ち、彼の〈権力〉分析は必ず、ある属性を持つとされる、ある種の主体の構成に関わるものであり、その問題へと収斂していくものであることが。分析の対象となる、諸力の闘争の場であり生産的なメカニズムである局地的・種別的な諸実践の連関は、その中である種の主体が生み出されるような関係の束なのだ。「戦略」の分析によって、歴史上のある時点からそうした主体が生み出されるようになったのは何故か、が理解可能となり、「技術」の描写によって、どのような実践からそうした主体が構成されるのか、が明らかにされる。

逆に言えば、構成されるものとしての〈主体〉、という特異な問題設定が（明確に定式化されて表明されることはなかったにせよ）先にあったからこそ、〈主体〉を取り巻く局地的・種別的関係が分析対象として彼の目の前に浮かび上がってきたのだ。フーコーは一九八一年、アメリカでの講演の中で次のように語っている。「……私の研究の統一的主題は権力ではなく、主体なのである。（中略）……権力の定義を用いて主体の対象化を研究しようとするならば、権力を定義する次元を拡大しなければならなかったのだ。[31]」

フーコーは管理されるだけの人間を描いたのではない。単にアルチュセールの主体＝従属体（ともに sujet）という定式化を継承したのでもない。初め主体の理論を拒絶した彼が、晩年になって主体に回帰した、などと考えるのも大変な誤りである。彼にとって〈主体〉は、議論の起点に始源・基礎として置かれるべきものではなく、それ自体――なぜ、ある文化において、ある時代から、人は自らをある種の主体として認識し・構成するようになったのかが――、問題として解明されねばならないものだったのだ。彼の〈権力論〉は、人間一般についての単純な仮定を前提に置き、そこから権力一般、社会秩序一般に関する知見を導き出そうとするような議論とは、正反対の方向を目指す作業のために練り上げられたものであった。[32]

従って、フーコーが権力理論を刷新した、というような言い方は、あまり適切なものではないのだ。彼がその概念化と分析を目指したものは、その中で〈主体〉が構成されるような諸力の関係であって、一般的・常識的に権力現象として捉えられていることどもの全てではなかったのだから。

肝心なのは、「今日、我々がしかじかのものとして存在せしめられているのは、なぜなのか」という、これまで（少なくとも〈社会学〉の中では）ほとんど考えられることのなかった問題を彼が提起した、ということである。彼の、〈権力〉の概念化に関する諸々の提案の企図するところや、〈権力の分析〉の発見的諸価値は、この〈主体〉の問題化を前提として、はじめて十全に理解されるものである。

残された紙幅はあまり多くないが、次章では、この問題設定自体の含意するところを、「唯名論／特異なマテリアリズム」「諸力の関係としての実践の連関への着目」といった、これまで見てきた〈メタ理論的前提〉と関連させて敷衍・整理し、またこうした「発想の

転換」の由来するところを確認しておきたい。

Ⅳ　問題としての〈主体〉
― 政治的現象としての人間

第Ⅱ章、注(8)の引用にある通り、一九八〇年代に入るとフーコーは、「〈主体〉として指示される事柄を分析するために、今度は、第三の立場の移動を企て」る。その結果、彼の研究対象となったのは、「個人が主体として自己を構成し認識する手だてとしての、自己との関係の形式や様態」であった。

つまり、個々の主体に先んじて、自己が自己に関係する実践が存在するのである。例えば、健康・家庭の管理・性愛……といったそれぞれの問題領域において、自己を統御する・自己に配慮する・自己を認識する・自己の一部を放棄する……といった、様々な、自己の自己に対する関わり方＝「自己の実践」の様式が存在するのだ。こうした特定の形態の実践を通じて、人間は自らを主体として構成し、認識するのである。〈主体〉もしくは〈主体性〉は、ことの始まりにある実体ではなく、関係の効果として事後的に構成される抽象なのである。言い方を変えれば、人が自らを主体として創造するプロセスが、そのプロセスだけが存在しうるのだ（実体としての権力ではなく、闘争のプロセスとしての諸力の関係があるように）。次のようなドゥルーズの見解も参考となろう。

「抽象によって説明されるものなど何一つ存在しないのであって、抽象の方こそ説明されなければならないのです。普遍的概念など存在しないし、超越的概念も存在しない、さらに〈一なるもの〉も、主体（そして客体）も、また理性も存在しない。あるのはプロセスだけなのです。統合のプロセスでも、主体化や合理化のプロセスでもかまいませんが、とにかくプロセス以外のものは存在しないのです。[33]」

人間に関する「抽象」の方を説明すること。これがフーコーが『狂気の歴史』から一貫して追求してきた課題であった。[34] その抽象は何から説明されるのか？　これまでに見てきたように、抽象に先だって存在する、諸々のマチエールや、歴史の中の様々な形態の実践の連関（非作用・変形のプロセス）から、である。

注(8)を引いたところの、『性の歴史Ⅱ・快楽の活用』の序文の中で、フーコーは次のようにも語っている。

「要するに問題は、個々人が自分を〈セクシュアリテ〉の主体として認識しなければならなかったような〈経験〉が、近代西洋社会においてどのようにして構成されるにいたったかを検討することであったが、このセクシュアリテというものは、極めて多様な認識の諸領域に通じており、また規則と強制の体系に基づいて構成されている。従って、〔当初の〕計画は経験としてのセクシュアリテの歴史についてであった――その場合に経験とは、知の諸領域と規範性の諸類型と主体性の諸形式との間の、ある文化における相互関連を指すとしたのである。[35]」

人間を取り囲む一かたまりのマチエールの配置と実践の連関が、

即ちその時代の人間の〈経験〉を構成するのだ。諸々の規則に従う言説的実践から構成される〈知〉、種々の戦略に沿った実践から構成される〈権力〉、ある形態の自己に関係する実践から構成される〈主体性〉の三者が、〈経験〉において相互に関連し、混合体をなしている（しかし、相互に還元することはできない）三つの次元／相／契機として再定式化されたのである。[36]

以上に瞥見してきたような、〈主体〉は事後的に構成される抽象であり、第一義的に実在するのは実践（非活動・作用）の関係である、とする発想の転換は、フーコーによって初めて開示されたものではない。哲学畑では周知の事実であろうが、フーコーとドゥルーズが、こうした徹底して関係論的・動的なものの見方と、形而上学的主体概念への批判を継承したのは、ニーチェからであった。

ニーチェが残した数々の驚嘆すべき洞察を、フーコーがどのように変奏・応用したか、という大問題に関しては、いずれまた稿を改めて丁寧に論じたいと思う。ここでは、ニーチェ自身の言葉を引いて、フーコーの〈メタ理論的前提〉の、言わば〈原型〉を確認しつつ、問題の提起と定式化を行うにとどめておく。

「ある量の力とは、まさにそれと同量の衝動、意志、作用のことである、――いなむしろ、じつにこの衝動のはたらき、意欲するはたらき、作用するはたらきそのものにほかならない。それがそうでなく見えるのは、すべての作用を作用者によって、すなわち一個の〈主体〉によって制約されたものと解し、誤解するところの言葉（さらには言葉のうちに化石した理性の根本誤謬）の誘惑に囚われるがためにほかならない。それはちょうど一般の民衆が稲妻をその閃光から切りはなし、後者を稲妻と呼ばれる主体の活動であり作用であると考えるのと同じく、民衆道徳もまた強さを強さの現れから切りはなし、あたかも強さを現すも現さないも自由自在といった超然たる基体が強者の背後にあるかのごとく思いなす。がしかし、そのような基体は存在しない。活動、作用、生成の背後にはいかなる〈存在〉もない。〈活動者〉とは、単に想像によって活動に付加されたものにすぎない、――活動がすべてである。[37]」

人間を主体とみなすこと、主体を議論の起点に置くこと、――こうした思考法は、経験の記述や科学に属するものだろうか？　むしろ習慣や信念に類するものではなかろうか？　「権力」や「実践」を主体＝主観に帰着させること、……これは本当の説明になっているのだろうか？　むしろ人がそれに慣れているがゆえに安心をもたらすような一つのパターンではないのか？

もう一つだけ、ニーチェの洞見を引用しておく。

「およそ意志する人間は――、自己内にある服従するもの、あるいは服従すると信じられるものに対し命令を下す。だがしかし、意志における――民衆がそれを表現するのにただの一語しかもちあわせないこの甚だしく多様なものにおける、次の奇妙至極な点に注意せられたい。すなわち、われわれは、どういう場合にも命令者であると同時に服従者であり、そして服従者としては、意志の働きとともにすぐさま起こるのがつねである強制・逼迫・圧迫・抵抗・運動などの感情を知っている。他面においてわれわれが、この二重性を

〈われ〉という綜合概念によって取り片づけ、ごまかし去るという習慣を持っているかぎり、意欲というものにはなお誤謬推論の全連鎖と、従ってまた意志そのものの誤った評価がまつわりついているわけだ。[38]」

フーコー論からは少々話が逸れるが、一度こうした考え方に接すると、次のような問いを発したくなる。即ち、行為者の主観的意識に準拠して、権力現象の研究を進めることは、果たして適切であろうか？　例えば、権力現象の核心を「自分のやりたくないことをやらせられている」体験に求める立場がある。しかし、そうした体験が生じているとき、その状況を甘んじて受け入れて生きることを選んでいるのも、また、自分（の中の何か）なのだ。広く権力現象と呼ばれていることどもにアプローチするに際しても、こうした「我」の複数性（人間個体の中の複数の意志＝力）について、考えてみることが必要なのではないか。

なお、以上の二箇所の引用を見るだけでも、第Ⅲ章で取り上げた、個人の中で相争う「部分個人」、〈主体〉に先だって存在する「諸力」、といった諸概念が、空疎な思弁の産物などではなく、むしろ既存の（権力現象に関する）諸理論が適切に取り上げることができなかったような我々の経験に、光を当てるものであることが理解せられることと思う。

ニーチェ、フーコー、ドゥルーズ等によって、そこから政治が始まるものとしての〈主体〉ではなく、それ自体が政治的現象であるところの〈人間存在〉、という問題領野が切り開かれたのだ。筆者自身は、まずこの問題自体を「社会学界」の中に適切に位置づけたい、と考えている者であり、本稿もそうした目論見から生まれたものである。

V　むすびにかえて

以上、フーコーの〈権力論〉が、その中で個人がある種の主体へと変形せしめられるような、関係／プロセスの記述－分析を目指したものであることを、また、そうした作業の前提として、徹底的な歴史内在化、特異なマテリアリズム、実践が人間の属性に先立つと考える関係論的転回、などがあることを確認してきた。フーコーの〈権力論〉が、旧来の権力に関する諸議論とは、全く異なった〈メタ理論的前提〉の上に展開されているものであることはご理解いただけたかと思う。〈フーコー権力論〉について語る者は、まず、この〈前提〉自体を検討した上で、その批判なり、称賛なりを行うべきである。

筆者としては次のように主張したい。即ち、フーコーの諸テクストは、我々の思考・推論の前提に対する再考を促すものとして、読まれねばならない。例えば「権力」についての関心からフーコーを読むのであれば、以下のような問いを一度自らに対して発してみるべきである。「我々は、これまで権力というものについて考えてきた際、多くの形而上学的前提を不問にしてきたのではないか」「まず、権力と人間の存在形態との間に複雑な関係がありうるのではな

いか」「権力という概念を用いて、我々は何を問題にしたいのか、何を解明したいのか」「そのように考えることを我々に強いる歴史的状況とは何なのか」――彼の議論の前提の綿密な検討は、こうした反省的・根源的な思考へと我々を促す。筆者には、ここに、〈フーコー権力論〉の、社会学に対する最も貴重な刺激もしくは効用が、――今日的な、また今後もしばらくは保たれるであろう価値が、存するように思われる。

なお、本稿では、一貫して、「主体・主観＝起源／基礎」とするような思考の枠組と、そこから生ずる種々のフーコーに対する誤解とを批判してきた。敢えて言い切ってしまうと、筆者は、人間主体に権力の起源／基礎を求めるような議論は思弁・形而上学であり、フーコーやドゥルーズ等の方が、我々の本物の経験を理論化・概念化すべく努力している、と考えている。この問題に関しては、第Ⅳ章で提示した課題とともに、いずれまた稿を改めて丁寧に論ずる所存である。

注

フーコーの著作からの引用文は、相沢が直接訳出したものと考えていただいてよい。邦訳のあるものは参照させていただいたが、一々ことわることなしに訳し直した箇所が多い。

(1) 社会学者によるものとして、次の二冊を挙げておく。バリー・スマート、山本学訳『ミシェル・フーコー入門』新曜社、一九九一。内田隆三『ミシェル・フーコー』講談社、一九九〇。

(2) 本稿と同じような問題設定のもとに書かれている先行業績として、近藤哲郎の「フーコーの権力概念と権力分析の構図」(『ソシオロジ』一九八九年九月号)、「フーコーにおける権力分析のパラダイム」(『ソシオロジ』一九九〇年一月号)がある。ただし、そこで抽出されている「構図」「パラダイム」と、本稿で論ずる〈メタ理論的前提〉とでは、その抽象の水準などがかなり異なっている。読み比べていただければ幸いである。

(3) *Histoire de la sexualité I: La volonté de savoir*, Paris: Gallimard, 1976. p.123.(渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ・知への意志』新潮社、一九八六、一二〇頁)。なお、以下、本書を *VS* と略記する。

(4) 'The Confession of the Flesh', in C. Gordon. (ed.). *Power/Knowledge*, New York: Pantheon, 1980, pp.198～199.(増田一夫訳「装置・性現象・無意識」『同性愛と生存の美学』哲学書房、一九八七、一一六～一一八頁)。

(5) 'The Subject and Power', in H. L. Dreyfus & P. Rabinow, *Michel Foucault*, University of Chicago Press, 1983, p.217.(渥海和久訳「主体と権力」『思想』一九八四年四月号、二四二頁)。

(6) 例えばフーコーは次のように語っている。「私は今まで〈権力〉という言葉をほとんど使ったことがありません。また、ときどきこの言葉を使うとすれば、それはいつでも、私が常に用いている表現、つまり権力の諸関係という表現を短く表すためです。」'the ethic of care for the self as a practice of freedom', in J. Bernauer & D. Rasmussen (ed.). *The Final Foucault*, MIT Press, 1991, p.11.(山本学他訳『最後のフーコー』三交社、一九九〇、三八頁)

(7) これについては次のものも参照されたい。J.ライクマン、田村俶訳『ミシェル・フーコー』、岩波書店、一九八七。

(8) *Histoire de la sexualité II: L'usage des plaisirs*, Paris: Gallimard, 1984, p.12.(田村俶訳『性の歴史Ⅱ・快楽の活用』新潮社、一九八六、一二頁)。なお、以下、本書を *UP* と略記する。

(9) 次のものから、表現を借りた。B・カッサン、本間邦雄訳「フーコー、

ハイデガー、そして〈古代〉」、蓮見重彦・渡辺守章編『ミシェル・フーコーの世紀』筑摩書房、一九九三、一〇四頁。

(10) P・ヴェーヌ、大津真作訳「歴史を変えるフーコー」『差異の目録』法政大学出版局、一九八三、特に九九～一二三頁。

(11) *Surveiller et punir*, Paris: Gallimard, 1975, p.203.（田村俶訳『監獄の誕生』新潮社、一九七七、二〇四頁）。以下、本書を *SP* と略記する。

(12) ライクマン、前掲書。特に序論及び第Ⅱ章を参照されたい。

(13) *SP*, p.31.（邦訳、三一頁）。

(14) *VS*, pp.121～122.（邦訳、一一九～一二〇頁）。

(15) A・ホネット、河上倫逸監訳『権力の批判』法政大学出版局、一九九二、二〇一頁。

(16) 渡辺和民・佐々木明訳『言葉と物』新潮社、一九七四。まず、本書が理解されねばならない。とりわけ第九、十章は重要である。

(17)「装置・性現象・無意識」、前掲書、一三六頁。

(18) *VS*, p.124.（邦訳、一二二頁）。

(19) *VS*, p.127.（邦訳、一二四頁）。

(20) *VS*, p.124.（邦訳、一二一頁）。

(21) 'Vérité et pouvoir', *L'Arc* 70, 1977. p.21.（北山晴一訳「真理と権力」、山本哲士他編『ミシェル・フーコー　一九二六～一九八四』新評論、一九八四、八五頁）。

(22) 'Non au sexe roi', *Le Nouvel Observateur* 644, 1977. p.95.（山本哲士他訳「セックスと権力」、山本哲士他編、前掲書、五〇～五一頁）。

(23) *SP*, p.32.（邦訳、三一頁）。

(24) *SP*, p.134.（邦訳、一三三頁）。

(25) *SP*, pp.92～134.（邦訳、九二～一三四頁）。

(26) *SP*, pp.269～282.（邦訳、二六四～二七五頁）。

(27) *VS*, p.21.（邦訳、二一頁）。

(28) *VS*, p.137.（邦訳、一三四頁）。

(29) *VS*, p.79.（邦訳、七六頁）。

(30) *VS*, p.79.（邦訳、七七頁）。

(31) 'The Subject and Power', *op. cit.*, p.209.（邦訳二三五頁）。

(32) フーコーは、かって、自身の〈権力〉分析の試みは「『リヴァイアサン』におけるホッブズの企ての正反対のものとなろう」と語っていた。'Two Lectures', in C. Gordon (ed.), *op. cit.*, p.97.

(33) *Sur la philsophie*, "Pourparlers", Les Éditions de minuit, 1990, p.199.（宮林寛訳『記号と事件』河出書房新社、一九九二、二四四頁）。

(34)『狂気の歴史』における、「精神疾患である狂気」。『臨床医学の誕生』における、「病気」、「死」。『言葉と物』における、「経験的かつ先験的なもの」としての人間。『監獄の誕生』における、「犯罪者的人格」、「自らを律するものとしての精神」……。

(35) *UP*, p.10.（邦訳、一〇頁）

(36) これに関しては、次のものの、特に「トポロジー、〈別の仕方で考えること〉」と題された後半部分を参照せよ。G・ドゥルーズ、宇野邦一訳『フーコー』河出書房新社、一九八七。

(37) 信田正三訳、『道徳の系譜』（理想社版ニーチェ全集第十巻）一九六七、三六二頁。

(38) 信田正三訳、『善悪の彼岸』（同右）一九六七、三九～四〇頁。

Rethinking Foucault's "Analytic of Power"

This paper attempts to clarify the uniqueness of Michel Foucault's conceot of 'power' and its sighnificance for sociology, and to remove some sociologists' misunderstandings of Foucault's discussion of 'power.' In order to achieve these aims, I focus on the metatheoretical postulates / foundational assumptions of his conceptualization of 'power,' and show how they differ from those of his critics.

It is already well-known that Foucault used the model of 'struggle' in order to conceptualize power relations. Some sociologists, for example, A. Honneth, misinterpreted this as a struggle between human subjects, and criticized Foucault based on this misinterpretation. These misunderstandings stem from their metatheoretical postulates that I call the "metaphysics of the subject." Many of Foucault's critics place the abstract human subject at the starting point of their reasoning, making 'human' prior to and constitutive of history, and the origin of action and power in general.

I shall make it clear that Foucault's discussion itself destroys any idea of the "metapysics of the subject" — idealistic postulations of the human subject. He makes the distinctive assumption that the subject is not precursory to experiences, but that a human being is constituted as a specific subject within a configuration of contingent historical practices. He problematizes 'subjectivation.'

His analytic of power is part of the 'tools' of specific research in various subjectivation in Western history. A specific subjectivation takes place in complex relationships and dynamic processes. Multiple relations of forces are immanent in these processes. Foucault's model of struggle and conception of power was an attempt to grasp these relationships of forces prior to the transformation to a subject.

My conclusion is that Foucault's discussion of 'power,' and especially his concept of relations of forces prior to subjectivation, is based on a sort of relationalistic vitalism, 'a profound Nietzscheanism.' Any sociologist who reads Foucault's writings must consider this philosophical background.

Key Words

metatheoretical postulates, a configuration of practices, relationships of forces